

厚沢部川流域墓標の考古学的研究（中間報告）

石井淳平

2020年11月24日

概要

近現代考古学の実践として、過疎地域である厚沢部川流域の墓標について型式分類を行い、型式の消長、被葬年代について整理を行った。

厚沢部川流域を含む南檜山地域は近世には蝦夷地交易の中心地の一つである江差とその在郷で構成される。近代以降は北海道開拓や戦後引き揚げ者による開拓など、一時的に人口を回復する時期はあるものの、多くの自治体で昭和30年代をピークに一貫して人口減少が続いている。

こうした地域の縮小は、家族構成の変化を伴って進行し、いわゆる「少子高齢化」を特徴とする典型的な過疎地域を生み出している。こうした状況下において、過疎地域における「死者」の問題にどのように向き合うべきか、死者の死後の安寧を地域・家族がどのように支えるのかは、高齢化社会の重要な要素の一つである。

本稿は、近世南北海道の墓標調査を行った関根達人^{*1}の研究成果を借りながら、関根の対象から外れた近代以降の墓標の実態を把握することを通じて、関根の業績の補完をはかると同時に、現代の課題、すなわち、死者と社会の関わりについて考える現代考古学の実践とするものである。

1 先行研究

現在の墓標研究において主たる調査手法となっている墓標の悉皆調査は坪井良平^{*2}による山城木津惣墓の調査が最初である。また、中近世墓標の型式分類や調査項目の原型も坪井によって確立された。

坪井の実践のうち最も特徴的な悉皆調査は、膨大な労力を必要とすることもあり、その後の墓標研究の主流とはならなかったが、1990年代以降、大学や調査機関による大規模な調査が行われるようになったという^{*3}。

北日本における墓石の悉皆調査は関根達人らによる一連の調査がある^{*4 *5*6}。

中でも本稿の調査領域に隣接する江差の近世墓標調査は近世末期までに至る墓標型式の変遷と被葬者数、戒名などから社会構造や家意識、人口動態について明らかにされている。関根による南北海道の近世墓標の調査成果をまとめると以下のようになる。

1. 近世当初における少数身分による墓標建立から、より低階層・多階級への墓標の普及

*1 関根達人 2013『函館・江差の近世墓標と石造物 中近世北方交易と蝦夷地の内国化に関する研究』平成22年度～25年度科学研究費補助金基盤研究（A）研究成果報告書

*2 坪井良平 1939「山城木津惣墓墓標の研究」『考古学』10,1959『歴史考古学の研究』ビジネス教育出版社

*3 朽木量 2010「近世墓標研究の成果と総合的な墓制研究への期待」

*4 関根達人・澁谷悠子 2007『津軽の近世墓標』弘前大学人文学部文化財論ゼミナール調査報告VII

*5 関根達人 2010『近世墓と人口史料による社会構造と人口変動に関する基礎的研究』平成19年度～21年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書

*6 関根達人 2013

2. 五輪塔形や舟形から楕形、角柱形のような多面利用できる形状への変化
3. 個人墓から家族墓への移行、即ち「先祖代々」墓への移行

関根の到達点に依拠しながら、近現代墓地のあり様を考えることも本稿の重要な目的の一つである。

一方、近代以前の墓標ではなく、墓標の現代における変遷を問題とする研究も存在する。内藤理恵子は愛知県、東京都、富山県の現代墓地の調査を行い、「ニューデザイン墓石」を墓石変遷の流れの中に位置づけようと試みる*7。内藤の視点は墓標から現代社会の特徴とその行く末を見定めようとする点で筆者の関心と共通するものがある。

森謙二は現代墓制のキーワードを「有期限化」「共同化」「脱墓石化」とした*8。また、我が国の墓地埋葬法制が公衆衛生を重視する観点から整備されてきたことを指摘し、「死者の尊厳性の確保」を含む福祉サービスの側面が不十分であると述べる。石造物たる墓標に期待される永続性は、今後変化をよぎなくされるのか、また、家族墓としての性格を確立した近現代墓標が、今後、家族制度・世帯構成の変化を受けて、どの様な変化を示すのか、あるいは変化しないのかも、近現代墓標研究の重要なテーマである。

ここまで、簡単に近現代墓標をめぐる先行研究の中から筆者の問題意識と関わりの深い研究を列挙した。これらの先行研究を踏まえ、本稿で明らかにしたいことは次の点である。

1. 関根が明らかにした南北海道近世墓標が、近代以降、どのような型式的変遷を示すのか。
2. 近現代墓標について、中近世墓標の研究手法（悉皆調査、形式学的研究、文字史料の組み合わせ）を取り入れた際にどのような社会構造や家族構造が復元できるのか。
3. 現在を生きる人間の営みと墓標の建立にはどのような関わりがあるのか（なにを求めて現代人は墓標を建立するのか）。

2 厚沢部町内の墓地

2.1 墓地の概要

厚沢部町内には13箇所の墓地がある。経営主体はいずれも厚沢部町*9であるが、いわゆる「ムラ墓地」*10である。それぞれの墓地に管理組合が設置され、事実上の管理経営が行われている。

これらの墓地のうち、美和墓地と鶉墓地、中館墓地と南館墓地、富里墓地は許可年月日が同日、富栄墓地は中館墓地などから1日遅れた許可年月日となっており、これらが事実上の使用開始年代とは考えにくい。以前から存在した墓地が行政指導等によって一律に許可された可能性が高い。このうち、近世から存続することが明らかな集落は、美和、富栄、南館町、鶉などであり、これらの集落に付随

*7 内藤理恵子 2010「現代日本における墓石の形状変化」『南山宗教文化研究所研究所報』第20号,pp.23-42

*8 森謙二 2000『墓と葬送の現在』東京堂出版

*9 平成12年12月6日付生衛発第1764号「墓地経営・管理の指針等について」2(2)墓地経営主体の項において、「墓地経営主体は、市町村等の地方公共団体が原則であり、これによりがたい事情があっても宗教法人又は公益法人等に限られること。」とされる。

*10 森謙二は近代的な墓地法制が展開される以前にできた墓地を「伝統的墓地」とし、その類型として「部落有（ムラ）墓地」、「寺院墓地」、「同族墓地」、「個人墓地」を挙げる。ムラ墓地は「部落（旧村＝ムラ）が所有する墓地であって、その利用者は部落（旧村＝ムラ）の構成員に限定される」ものとする（森謙二「第一部 無縁墳墓についての研究－無縁墳墓改葬公告の研究－」『少子高齢化社会における墓地及び墳墓承継に関する法社会学的研究』平成13-15年度科学研究補助金実績報告書,pp.1-34）。

する墓地は近世から継続的に営まれたものもあると考えられる。上里、赤沼町なども近世から継続する集落であるが、近代に移転された履歴をもつ。

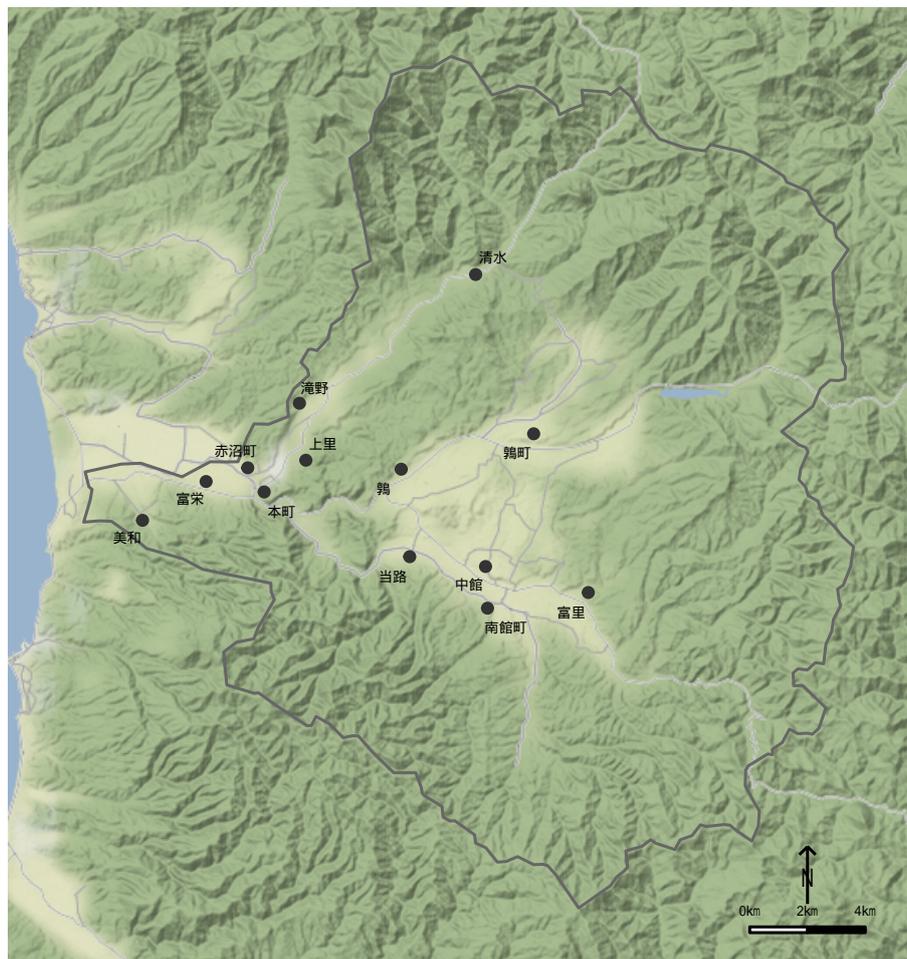


図1 厚沢部町内の墓地

表1 厚沢部町内墓地一覧

名称	所在地	許可年月日	面積
美和墓地	字美和 147	1880年3月1日	1,064
富栄墓地	字富栄 247	1897年4月18日	1,115
本町墓地	本町 144	不明	2,842
赤沼墓地	赤沼町 359	1956年7月20日	2,024
上里墓地	字上里 513 - 2	1972年7月20日	1,690
滝野墓地	字滝野 898	1916年4月26日	1,897
清水墓地	字清水 93 - 5	1991年6月25日	450
鶉墓地	字鶉 421	1880年3月1日	3,609
鶉町墓地	鶉町 451	1897年2月19日	5,324
当路墓地	字当路 537	1897年3月1日	2,300
中館墓地	字中館 323	1897年4月17日	3,123
南館町墓地	南館町 176	1897年4月17日	3,113
富里墓地	字富里 259	1897年4月17日	3,999

3 墓標調査要領

3.1 調査項目

調査項目は関根達人^{*11}による道南の近世墓標調査項目を参考とし、以下のとおりとした。

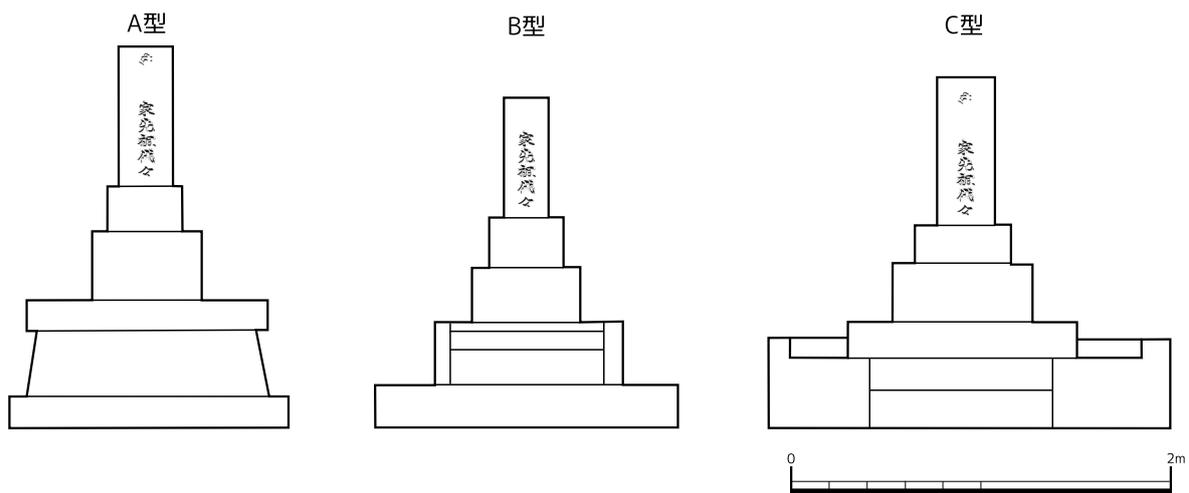


図2 台座の分類

^{*11} 関根達人 2013

表 2 調査項目

place	墓地所在町丁目名	
title	墓碑	「〇〇家之墓」等
mark	家紋の有無	
symbol	屋号の有無	
type	墓標の型式	平頭角柱, 丘状頭角柱, 角台角柱, 西洋型, デザイン
material	石材	花崗岩白, 花崗岩黒, 粘板岩, 凝灰岩, 花崗岩
char_face	利用面	1~4
base	台石	上台石, 中台石, 芝台石, 無
plat_form	台座	A 型, B 型, C 型, 無
build_date	建立年	
oldest_date	最古の被葬年月日	
newest_date	最新の被葬年月日	
pop	被葬者数	
sao_hight	竿石高さ	
sao_width	竿石幅	
sao_depth	竿石奥行	
all_hight	地表からの全高	

3.2 地形測量

SfM/MVS による地形測量を行った。一眼レフカメラを 1.9m のポールに装着し、ポール下端を腰位置で保持し墓地内の俯瞰写真の撮影を行った。撮影地上高は約 3m である。撮影写真は 1 箇所当たり 500 枚から 2000 枚である。

地理院地図航空写真等を利用し、墓地周辺のランドマーク地点（道路交点、建造物端点）の座標を求めた。墓地内の相対標高はオートレベルを使用して計測した。

Metashape (Agisoft) でアライメント及びメッシュ作成を行い、CloudCompare で幾何補正を行いオルソ画像と DEM を出力した。

オルソ画像から墓石のトレースを行い、DEM から作成した等高線を組み合わせて調査基本図とした。

4 墓標の分析

4.1 建立年

赤沼墓地及び上里墓地はそれぞれ 1956 年、1972 年に現行墓地の許可がなされている。

上里墓地は 1972 年に意養の旧墓地から現在地に移転した。また、昭和初期には現在の道道 67 号沿い上里沢川にあったとされており（上里在住 MY 氏聞き取り）、頻繁な移動がおこなわれたことが明らか

かである。上里墓地は移転時の1972年頃を境に建立墓標数が急増しており、墓地移転に伴って新規建立が増加した様子が伺える。2000年代に入り、新規建立は減少している。

新町墓地は1960年代から墓標の建立が増加しており、1970年代から1990年代が墓標建立のピークである。

赤沼墓地は、1956年以前は、道道460号（乙部厚沢部線）に面した山手側、つまり現在地からみて約200m南に旧墓地があったようである（本町在住YK氏聞き取り）。赤沼墓地は墓地移転直後に建立数が急増することはなく、1970年代に建立数が増加する。

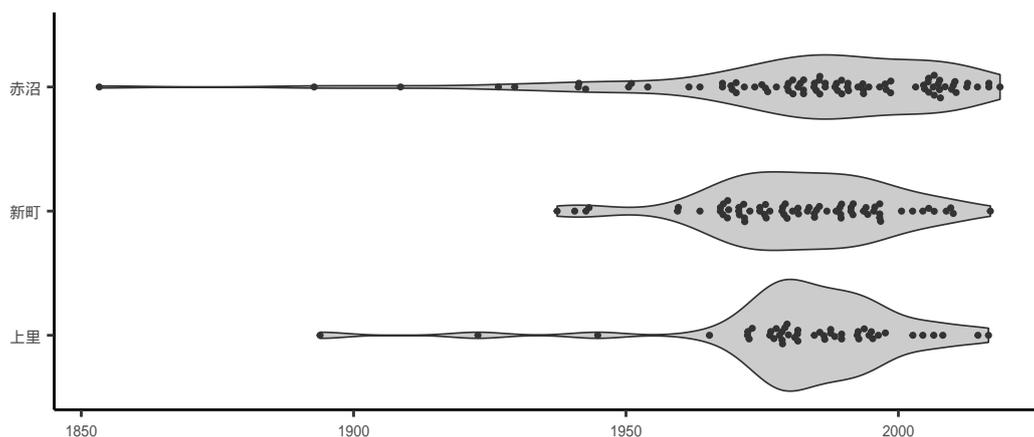


図3 建立年

4.2 最古の被葬年

赤沼墓地は19世紀に遡る被葬者が確認できるのに対して上里墓地では1920年代が最古の被葬者である。上里墓地については、墓地移転が繰り返された結果、古い被葬者に伴う墓標が失われたものと考えたい。新町墓地は1940年代以降に最古の被葬者が増加する。赤沼墓地の最古の被葬者が1930年以降、万遍なく出現するが、上里墓地では1930年代から1940年代に、新町墓地では1940年代から1970年代にピークを迎える。

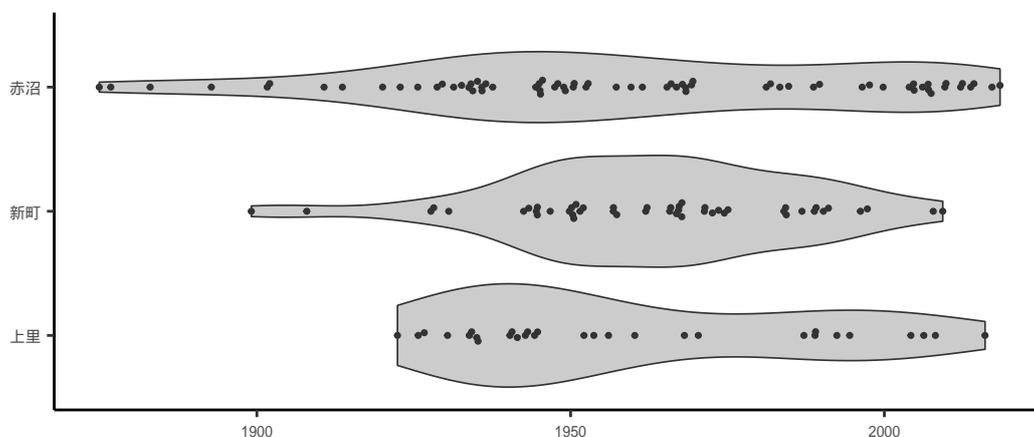


図4 最古の被葬年

4.3 最新の被葬年

赤沼墓地では2000年以後に被葬者数が増加している。赤沼町では1970年代から80年代に公営住宅や団地造成が進められたことから、当時の新規居住者が被葬者となった可能性がある。新町墓地は1960年代以降細心の被葬者が。上里墓地では移転後の1970年代以降、大きな変動はみられない。被葬者の追加、という点で赤沼墓地では長期に渡って追加の被葬が行われない墓標が多いことを意味する。

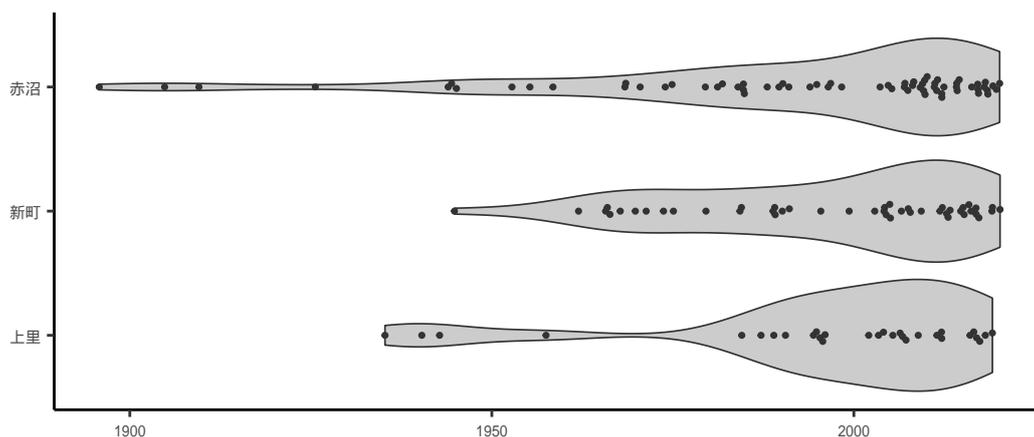


図5 最新の被葬年

4.4 石材利用

単に「花崗岩」としたものは、表面の光沢がないものである。

光沢のある「花崗岩白」が登場するのは1940年代で2000年ごろまで盛んに利用される。2000年代に入ると「花崗岩白」の利用は低調となり「花崗岩黒」の利用が増加する。

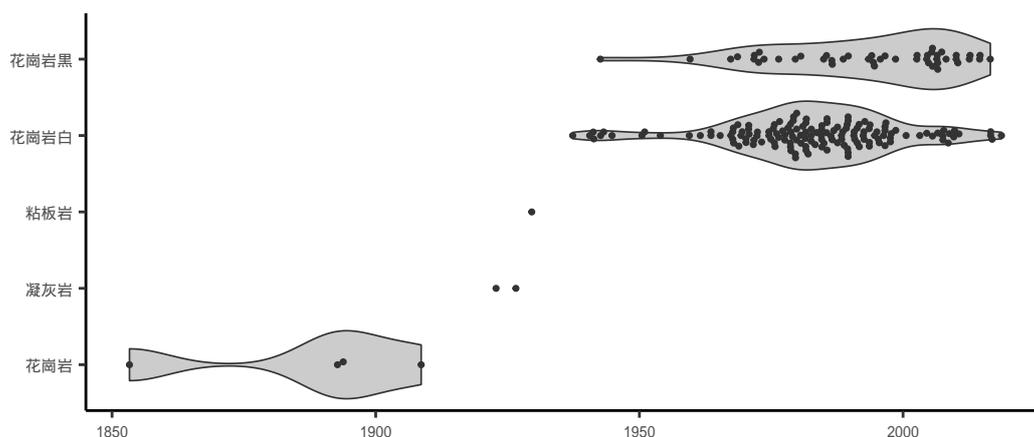


図6 石材利用の変化

4.5 墓標型式

「丘状頭角柱」、「平頭角柱」、「角台角柱」は近世から続く墓標型式である。「西洋型」は板状の墓標で2000年代以降は墓標の主流となる。伝統的な墓標型式のうち、「角台角柱」は2000年代に入っても建立されている。変遷順は「櫛形」→「丘状頭角柱」→「平頭角柱」→「角台角柱」→「西洋型」となる。

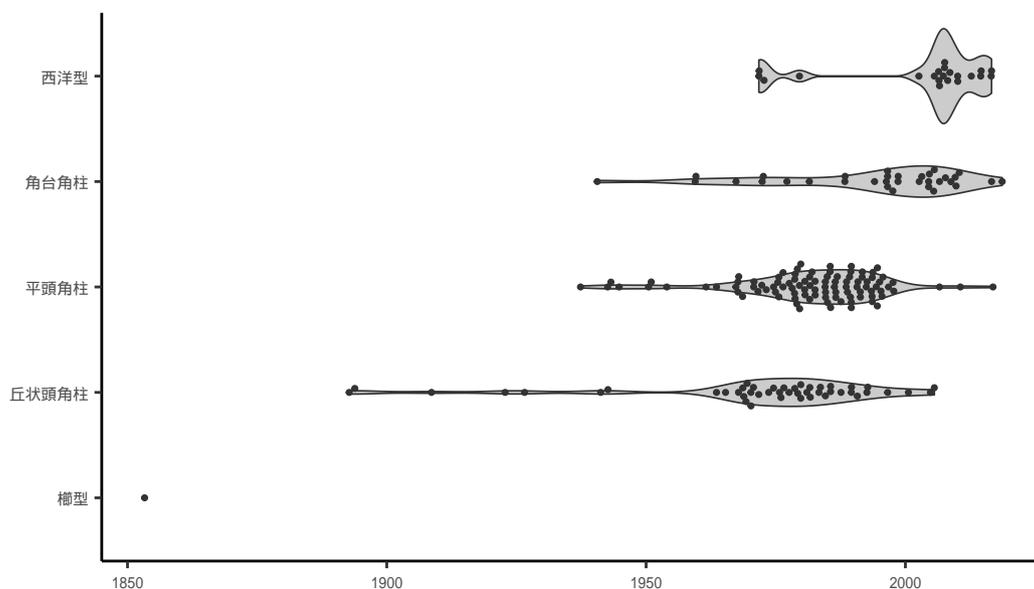


図7 墓標型式の変化

4.6 墓標型式と石材

近世から続く伝統的な墓標型式（平頭角柱～丘状頭角柱）では「花崗岩白」の比率が高く、2000年代から顕著になる「西洋型」では「花崗岩黒」が高い比率で出現する。「花崗岩黒」が新しい材質であることから、新形式の「西洋型」や2000年代に入っても建立が続く「角台角柱」などで高い比率となるのであろう。

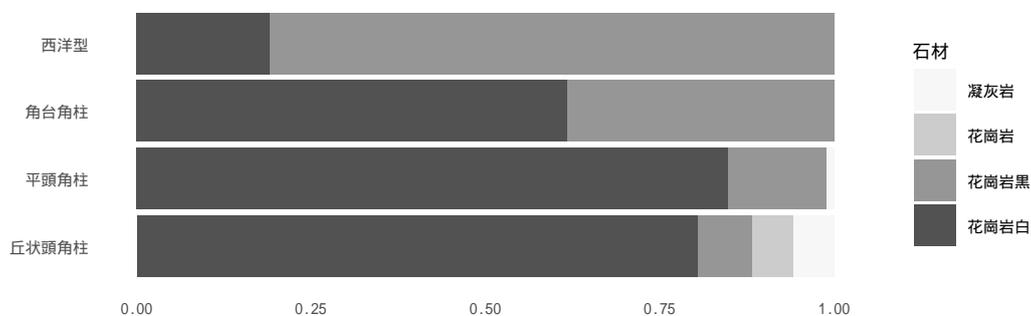


図8 墓標型式と石材

4.7 墓標型式と被葬者数

被葬者数は墓標型式によって必ずしも明瞭な差は認められないように見えるが、分散分析^{*12}の結果(表4)から、平頭角柱と丘状頭角柱において被葬者数に有意な差があることがわかる。

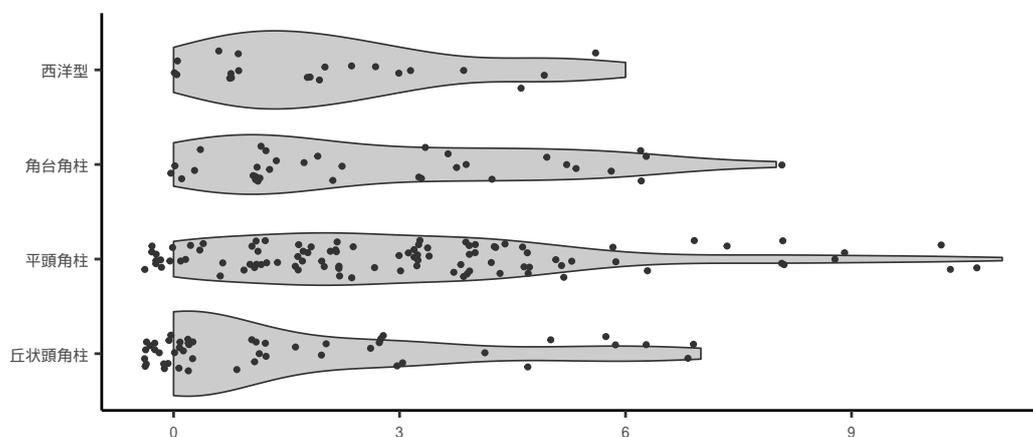


図9 墓標型式と被葬者数

表4 墓標型式と被葬者数 (AOV)

contrast	null.value	estimate	conf.low	conf.high	adj.p.value
平頭角柱-丘状頭角柱	0	1.521	0.464	2.579	0.001
角台角柱-丘状頭角柱	0	1.076	-0.271	2.423	0.167
西洋型-丘状頭角柱	0	0.571	-1.002	2.145	0.783
角台角柱-平頭角柱	0	-0.446	-1.648	0.757	0.772
西洋型-平頭角柱	0	-0.950	-2.402	0.502	0.329
西洋型-角台角柱	0	-0.504	-2.179	1.171	0.863

4.8 墓標型式と最古の被葬年

墓標型式における最古の被葬年の分布はおよそ墓標型式の構築年代の分布に似る。しかし、たとえば2000年代以降に出現する西洋型においても1950年以前の被葬者が一定数存在する。表5に示すように墓標型式と最古の被葬年には多くの組み合わせで有意な差が認められ、有意差が認められないのは平頭角柱と丘状頭角柱、角台角柱と平頭角柱、西洋型と角台角柱である。これらはいずれも建立年代が近い墓標型式の組み合わせである。

^{*12} 統計解析環境 R (ver4.0.3) の aov 関数により分散分析を行い、TukeyHSD 関数により Tukey の Honest Significant Difference 法による検定を行った。

表 5 墓標型式と最古の被葬年 (AOV)

contrast	null.value	estimate	conf.low	conf.high	adj.p.value
平頭角柱-丘状頭角柱	0	5404.930	-1002.749	11812.61	0.130
角台角柱-丘状頭角柱	0	9535.174	1872.321	17198.03	0.008
西洋型-丘状頭角柱	0	15917.674	7419.159	24416.19	0.000
角台角柱-平頭角柱	0	4130.244	-1899.749	10160.24	0.287
西洋型-平頭角柱	0	10512.744	3451.140	17574.35	0.001
西洋型-角台角柱	0	6382.500	-1834.994	14599.99	0.186

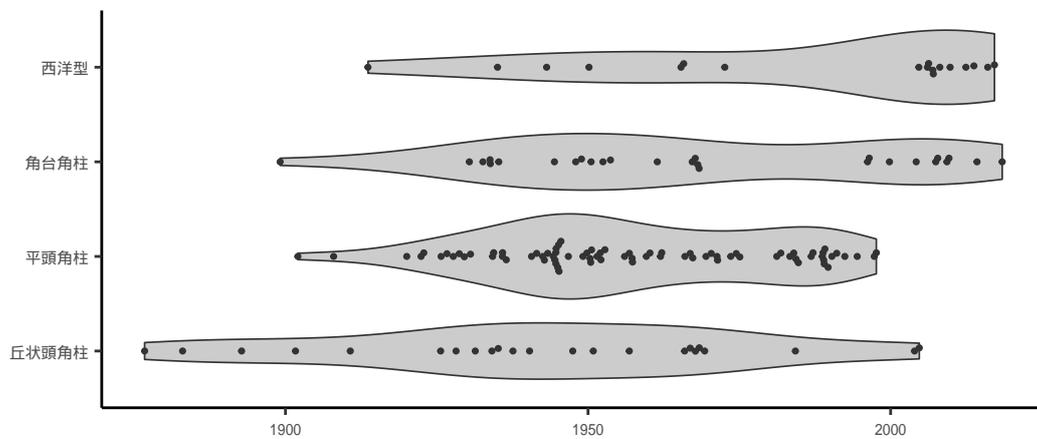


図 10 墓標型式と最古の被葬年

4.9 墓標型式と最新の被葬年

最新の被葬年は墓標型式と明確に関連する。丘状頭角柱のように 20 世紀以前から連綿と被葬のある墓標型式もある。有意差が認められないのは角台角柱と平頭角柱、西洋型と角台角柱である。

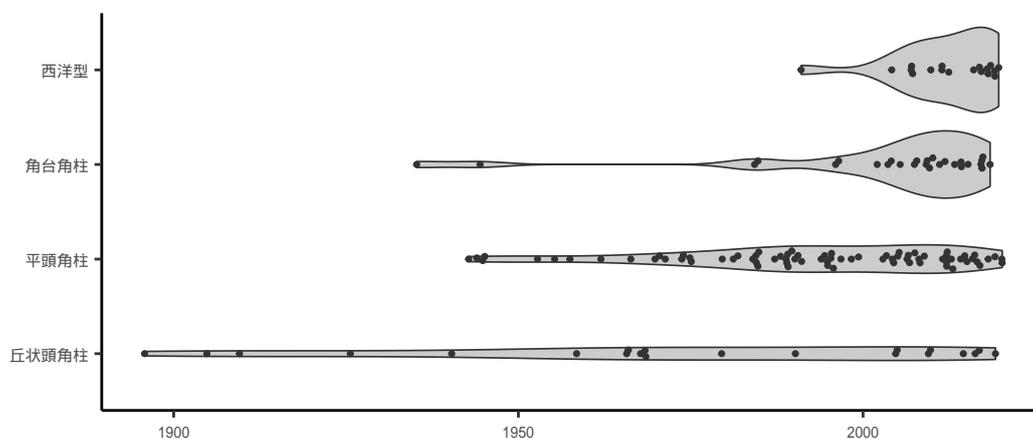


図 11 墓標型式と最新の被葬年

表 6 墓標型式と最新の被葬年 (AOV)

contrast	null.value	estimate	conf.low	conf.high	adj.p.value
平頭角柱-丘状頭角柱	0	7113.150	1684.956	12541.345	0.005
角台角柱-丘状頭角柱	0	10848.302	4451.113	17245.490	0.000
西洋型-丘状頭角柱	0	14353.913	7291.607	21416.218	0.000
角台角柱-平頭角柱	0	3735.151	-1199.400	8669.702	0.205
西洋型-平頭角柱	0	7240.762	1469.980	13011.544	0.008
西洋型-角台角柱	0	3505.611	-3184.729	10195.951	0.525

4.10 台石の変化

1980 年代までは中台石までの墓標が主流であったが、1980 年代以降、芝台石の使用が増加する。また、2000 年代に入り、上台石のみの墓標が増加するが、西洋型に伴うものである。

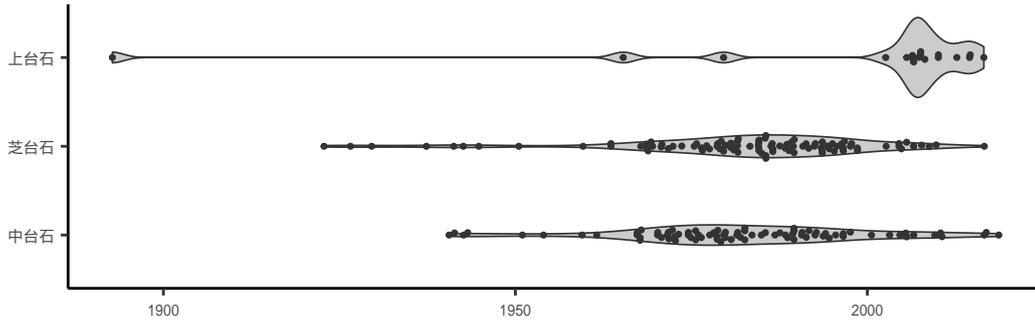


図 12 台石の変化

4.11 台座の変化

台座は墓標の高さを嵩上げするとともに、台座部分に地上式の納骨室を格納することで、湿気から遺骨を保護する機能を有する。伝統的な墓標は明瞭な台座をもたないが、1970年代から記念碑類にみられるような墓標を嵩上げする台座（A型）が用いられるようになる。B型とC型は、A型と比較して低くつくられるもので、当該墓標の墓域全体を台座で占有するように配置するものが多い。C型は外柵と一体化したものである。西洋型に付随する台座の大半はB型とC型である。

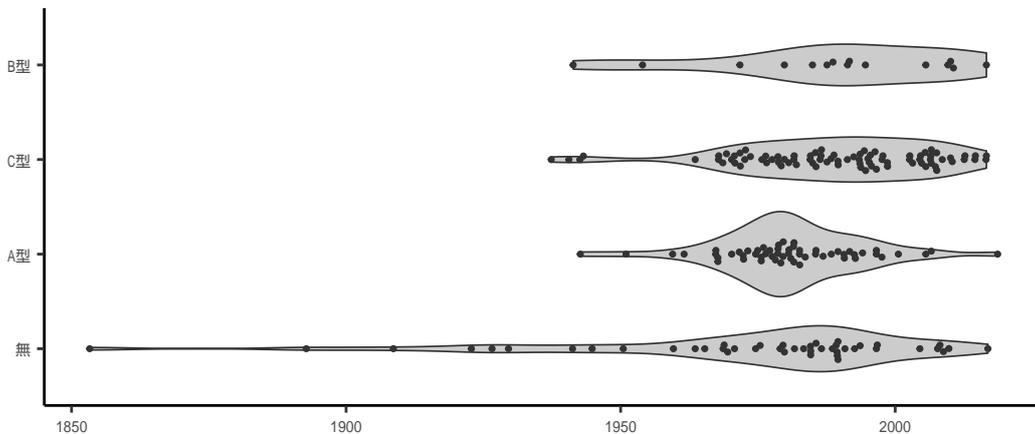


図 13 台座の変化

4.12 被葬者数の変化

墓標 1 基あたりの被葬者数を建立年代別に算出した。近世後期の墓標については「個人墓から家族墓」への変化が定説となっている^{*13} ^{*14}。被葬者数が 10 人に達する墓標もあり、調査対象墓地の墓

*13 坪井良平（1939）は「元禄前後から一個の墓標に二人又はそれ以上の戒名が現はれることになって、一個の墓標は必ずしも一人のものではないことになってくる」とのべ、墓標の多葬化傾向を早くから指摘していた。

*14 関根達人（2019「墓石研究の視点と展望」『季刊 考古学』第 149 号、雄山閣、pp.19-21）は墓石が角柱形に修練する傾向を指摘し、「個人墓から家族墓への変化、具体的には墓石 1 基あたりの記載人数の増加により、多くの文字情報を刻むのに適した形態が求められるようになったことに起因する」とする。

標は「家族墓」として建立されたものが大半であることは間違いない。2000年以降の墓標についても複数人の被葬が多く、「〇〇家之墓」などの家を単位とした墓碑題字が一般的であることから、家族墓として建立されるものが大半である傾向に変化はないものと考えられる。

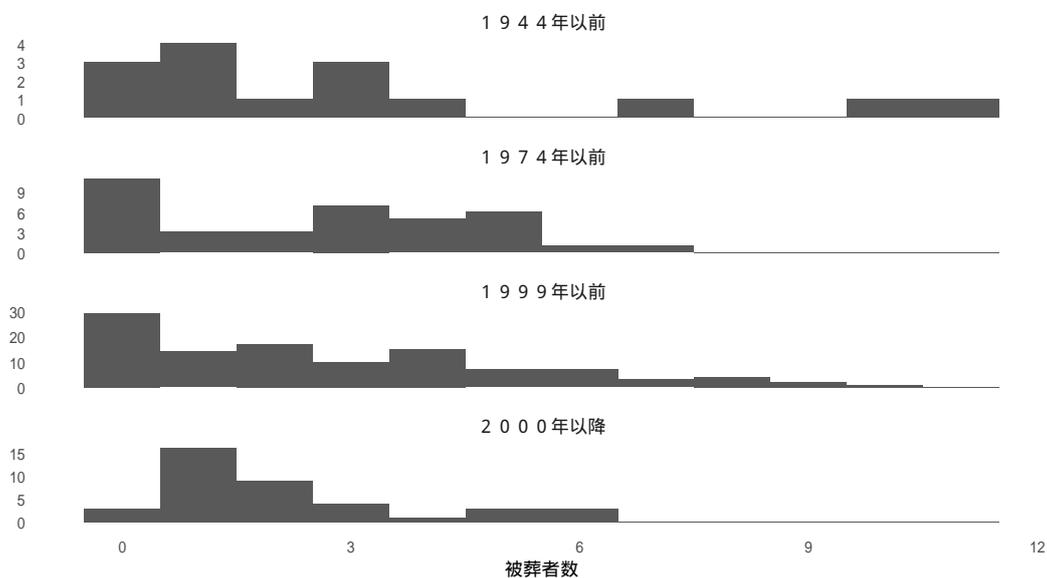


図 14 被葬者数の変化

4.13 全高の変化

墓標全高は、地表から墓標最高所までの高さである。竿石の肥大化や台石の重層化、台座の付属に伴って墓標全高にも変化が生じている可能性がある。1950年代以降、墓標全高に大きな変化はみられない。台石の重層化の影響や台座の付属の影響も限定的である。1950年以前の墓標には明らかに全高の低いものがみられるが、赤沼墓地、上里墓地に現時点で残る墓標の建立が開始された1970年代前後には、すでに今みる墓標の規模が成立していたと考えられる。2000年代以降では、「西洋型」の出現により、墓標全高は低下する傾向がある。

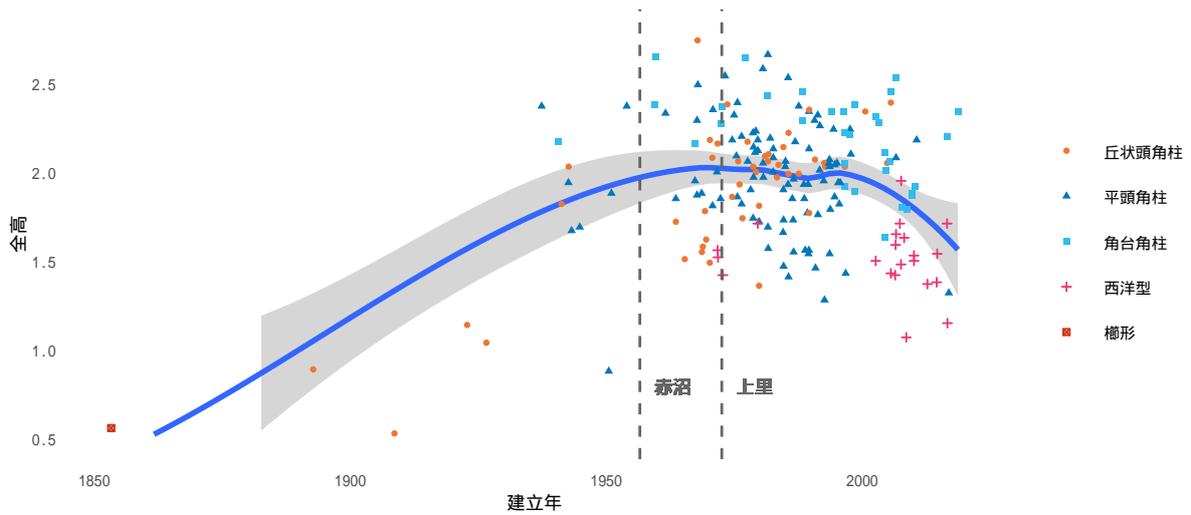


図 15 全高の変化

4.14 墓標の被葬年代幅

最古被葬者と最新被葬者の年代差を建立年代ごとに算出した。1970年代頃までは被葬年代幅は緩やかに増加する。1970年代以降の年代幅は低下するが、新規建立墓では相対的に被葬者数少ないと予想されることから傾向として年代幅が低下するのは当然であろう。一方、建立年代が新しいものでも50年以上の年代幅を有するものも多く、2000年以降の墓標では、年代幅が50年を超えるものと20年以内のものに二極分化するようである。建立年代による被葬年代幅は近年減少傾向はみられるものの、現代墓は依然として「先祖代々墓」としての性質を有するのであろう。

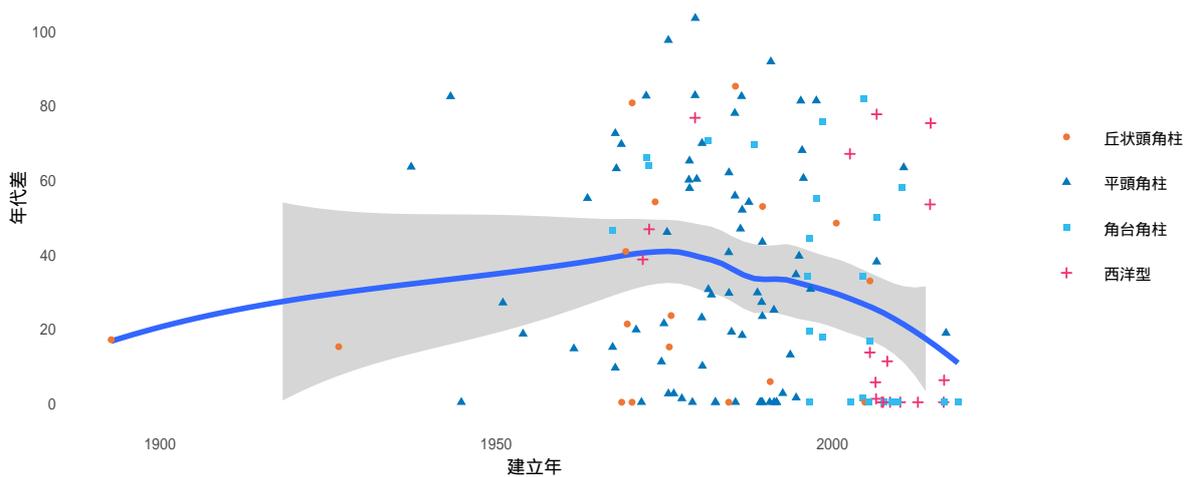


図 16 最古被葬者と最新被葬者の年代差

5 上里墓地の様相

5.1 建立年

上里墓地は、中央通路を挟んで北西と南東に墓標が分断される。1960年代以前の墓標は南東側に多いが、北西角には明治・大正期の古い墓標がある。上里墓地の墓標建立年は1970年代から1980年代に集中することから、1972年の墓地移転と同時に多くの墓標が旧墓地から移設あるいは新築されたのであろう。



図 17 上里墓地における墓標建立年

5.2 最古の被葬者

最古の被葬者のうち1960年以前にさかのぼるものは南東側に多くみられる。



図 18 上里墓地における最古の被葬者

6 新町墓地の様相

6.1 建立年

新町墓地は 1995 年に東側に拡張されており、この領域には新規建立の墓標が多いと考えられる。上里墓地に比べ 1960 年代以前にさかのぼる墓標が多くみられる。墓地西半の調査を終えた時点で建立年の空間配置に偏りはみられない。

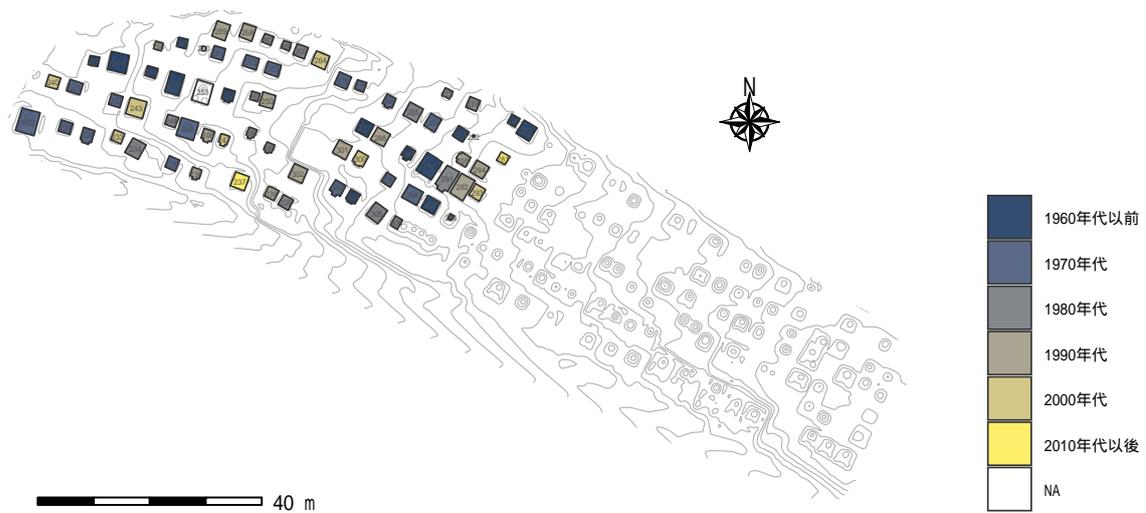


図 19 新町墓地における墓標建立年

6.2 最古の被葬者

1960年代以前の被葬者が多くみられる。建立年の古さに比例して最古の被葬者も古くさかのぼるものと考えられる。最古の被葬者の空間配置についても偏りはみられない。

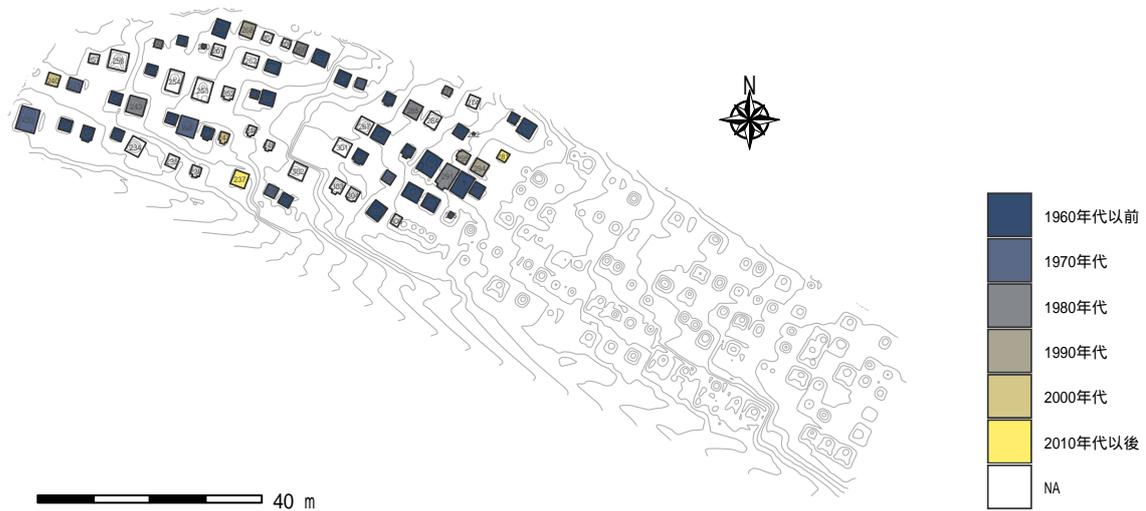


図 20 新町墓地における最古の被葬者

7 赤沼墓地の様相

7.1 建立年

2000年代以降に建立された新しい墓標が目立つ。赤沼集落は1980年代に新規に団地が造成され、町営住宅や分譲地となった。2000年代以降も農地転用による新規住宅建設が進んでいる地域である。振興住民が多く、特に1980年代に移住した住民が近年の造墓主体となっているため、新規建立が他の2地区の墓地と比較して多いのであろう。

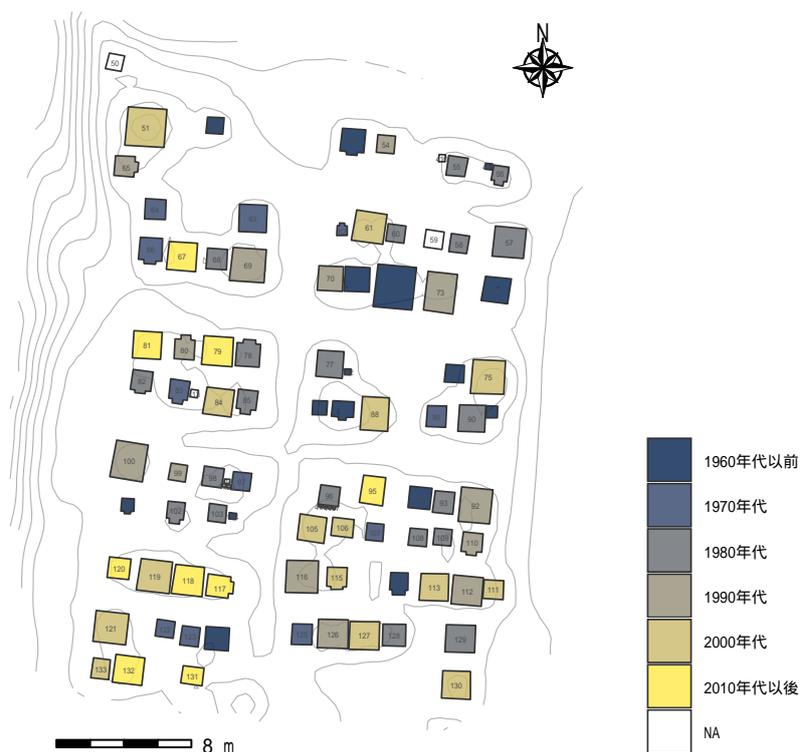


図 21 赤沼墓地における墓標建立年

7.2 最古の被葬者

一方、最古の被葬者が1960年代以前にさかのぼる墓標も多く、新規建立墓であってもいわゆる「先祖代々墓」として建立されたものが多いことがわかる。

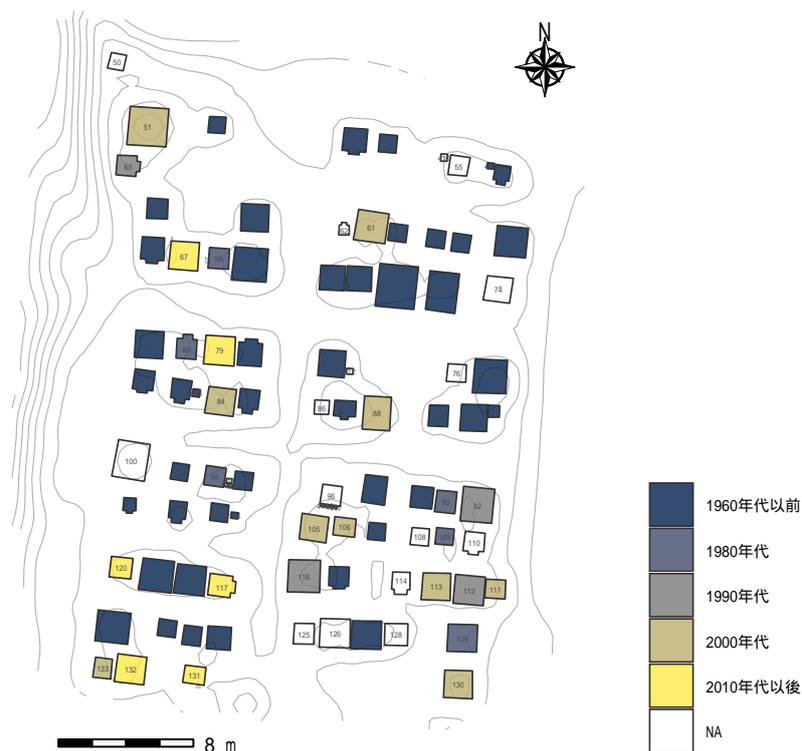


図 22 赤沼墓地における最古の被葬者

8 中間まとめ

ここまで墓標データに基づいて分析してきた点を以下にまとめる。

- 墓標の建立年は墓地の認可年とは無関係に 1970 年代に増加する。
- 上記にかかわらず、最古の被葬年や最新の被葬年は、墓地により差が生じている。
- 石材は 1940 年代以降、光沢のある花崗岩が用いられ、近年は光沢のある黒色の花崗岩が多く用いられる。
- 墓標型式は楕形→丘状頭角柱→平頭角柱→角台角柱→西洋型で推移する。
- 2000 年代以降建立される墓標は角台角柱か西洋型が主流である。
- 近年多く用いられる黒色の花崗岩は西洋型で卓越的に使用される。
- 「古式」の墓標である丘状頭角柱では被葬者数が少ない傾向があるが、他の墓標型式と必ずしも明確な差は認められない。
- 台座は 1970 年代に A 型が出現し主流となるが、外柵と一体化した C 型が近年では主流を占める。
- 建立年代別の被葬者数には顕著な差は認められず、墓標の多葬化傾向の衰退は認められない。
- 調査対象墓地の墓標建立が増加する 1950 年代以降、墓標の全高に増加傾向は認められない。
- 墓標 1 基あたりの最古被葬者と最新被葬者の年代幅は、建立年代によって差は認められず、墓標 1 基あたりの使用年代は少なくともこの 70 年間において増減していないといえる。

- 上里墓地は中央通路を挟んで東西に二分された構造をもつが、墓域の東西で墓標の建立年代等に差は見いだせない。
- 新町墓地は 1995 年に拡張されているが、今回調査範囲は拡張区は含まれず、その限りにおいては墓標の建立年代等に空間的な偏りは見いだせない。
- 赤沼墓地は上里墓地、新町墓地に比べ建立年代の新しい墓標が多く、1970 年代に造成された新興住宅地の住民による建立が近年進んだと考えられる。

墓標型式近は、世後期に一般的となる角柱形状の墓標が近代以降も利用され、楕形→丘状頭角柱→平頭角柱→角台角柱→西洋型と変遷する。2000 年代に入り、角柱形状の墓標とは全く異なる板状の「西洋型」が墓標の主流となる。石材は、花崗岩が多数を占め、表面が研磨され光沢をもつものが近現代墓標の特徴であろう。また、近年は白色の花崗岩が減少し、黒色の花崗岩を用いる墓標が増加する。

墓標の高さは 1950 年代以降一定の水準を保ち、巨大化が進行しているとは認められない。西洋型の出現により、墓標全高はむしろ低下する傾向もある。一方、墓標区画全体を台座が占め、外柵・台座が墓標と一体化したような C 型台座の出現により、墓標区画全体の質量感は増大した印象がある。

墓標 1 基あたりの被葬者数は、建立年代によって顕著な差はみられない。2000 年代以降の建立墓標においても、複数人を被葬する墓標や、被葬者の年代差が 50 年以上に及ぶものが一定数含まれることから、多くの墓標は、過去の家族をも含めて被葬する家族墓、先祖代々墓として建立されたと断じて良いだろう。

近現代における葬送儀礼の変化は、地域社会や家族構成の変質を背景に、葬儀社やセレモニーホールが介入し、地域社会の関わりが薄くなる傾向が指摘されている^{*15}。また、核家族化の進展に伴い、家の存続意識の希薄化が進行し、これに伴い墓や仏壇の継承が現実の家族と祖先祭祀の既成概念との間で矛盾を引き起こしていることも指摘されている^{*16}。

厚沢部町においても、葬儀には町内に 2 箇所ある葬儀社が何らかの形で関わっており、地域社会の関与は葬儀会場での受付や会計業務、賄い方程度に縮小している。また、かつては、同じ町内会や班に属する者は、仮通夜から通夜、告別式と 2 日以上拘束されることが普通であったが、これも 2010 年代に入り、通夜・葬儀を 1 日で終えてしまう傾向が現れ、最短で半日程度の手伝いで済むことも多くなっている。

葬儀における急速な変化や家族構成や家存続意識の変化と比較し、墓標にはそうした地域社会の変化が反映された痕跡を見出すことは難しい。新出の「西洋型」墓標にしても、家族墓・先祖代々墓とし

^{*15} 福澤昭司（2002「葬儀社の進出と葬儀の変容-松本市の事例を中心として-」）は、長野県松本市の葬儀社の開業者が「隣組の付き合いが希薄になってきているが、葬式を寺や公民館でおこなえばどうしても近隣の手伝いが必要となり、幾日も仕事を休んでもらうことで、申し訳ないと思っても迷惑をかけてしまうことが気になっていた」ことが開業の動機であったと述べたことを紹介している。

また、長野県伊那市における葬儀の変化を分析した喜馬佳也乃らは「長谷・高遠地区ではまだ昔ながらの伝統が残っており、150 人規模の葬儀を行う習慣がある。特に料理の振る舞いは重要視されており、葬儀だけでなく新盆での大盤振る舞いなども行われている。A 社のような葬祭業者が登場したことで、料理の負担を金銭的に解決できるようになったことで、生活改善運動によって一時質素化した振る舞い呂由利も、再び豪勢なものになっている」と述べ、葬儀社が伝統的な葬儀維持に貢献する事例を紹介している（喜馬佳也乃・山口桃香・李誌慧・鄭紫来 2019「長野県伊那市長谷・高遠区域における葬儀の変化」『地域研究年報』41,pp.177-187）。この例からは、葬儀社の介入が、必ずしも地域社会と葬儀の関わりを希薄化をもたらすわけではないことがわかる。

^{*16} 井上治代は祖先祭祀における現代的課題として「夫婦一台制、双方性という夫婦性家族の本質的な特徴と、直系性家族の世代的継承に基づく、単形成を基本とした先祖祭祀-墓や仏壇の継承-との間に整合性がなく、社会的・精神的な葛藤・確執となって今日的な問題が浮上してきている」と述べる（2003『墓と家族の変容』岩波書店,p3）。

ての性質を大きく変えるものとは考えにくいものである。少なくとも「墓標の建立」という行為において、1970年代以降、その求めるものに変化があったとは思えない。「属人化した墓標」というものは今回の調査において見出すことはできず、唯一、若年の被葬者の墓標において、当該故人の生前の職業を暗示する陰刻がなされた例が1件確認できたのみである。

近世後期に生じた墓標の普及と家族墓への移行は、近代を通じて進行し、約200年を経た今日において「墓に入らない」選択肢は「考えられない」状態となっている。現代においては何らかの方法で遺体を処理しなければならず、主たる遺体処理方法である火葬においては焼骨が残存し、これは墓地に「埋蔵」しなければならないこととされている*17。その場合、埋葬地点には何らかのモニュメントが必要と考えられるのであろう。そして、こうしたモニュメントを持たないという選択肢は簡単には選べない状況にある。墓標の建立が、社会の変化や家族構成の急激な変化によってもさほど変化を受けているように見えないのは、「遺体の最終処理」という肉体の最終的な居所と結びついているからであろう。「墓に祀ってもらえない」ということが、現代人にとって根源的な恐怖となっていることが墓標建立の重要な動機の一つであろう。地域社会の解体や核家族化によっても、というより、むしろそのような状況だからこそ、墓標は家族墓・先祖代々墓としてあり続けていると考える。

*17 墓地、埋葬等に関する法律4条において「埋葬又は焼骨の埋蔵は、墓地以外の区域に、これを行つてはならない。」と定められており、原則として遺体は墓地に埋める必要がある。